

第2回 学校デザイン部会 会議報告

日 時:令和7年3月4日(月)

午後4時～5時30分

場 所:川岸小学校2階 ふれあい教室

○次 第

1 開会

2 議題

(1)川岸小学校及び岡谷西部中学校のグランドデザイン

(2)福井大学教育学部附属義務教育学校の視察報告

3 閉会

○部会で確認した内容

- ・川岸小学校及び岡谷西部中学校のグランドデザインの比較(共通点など)
- ・福井大学教育学部附属義務教育学校の視察内容を報告・情報共有
- ・小中の日課表のたたき台の検討、話し合い。

○意見の概要

- ・グラウンドデザインの共通項にも「個性・多様性の尊重」、「人権教育の充実」とあり、多様な子どもたちに対応できる学校にしたい。
- ・小学校の先生と中学の専科の先生が一緒になって、繋がりを意識した授業づくりが出来る義務教育学校の強みを活かした学力が身につく学校にしたい。
- ・学年の区切りは引き続き、検討するが、4-3-2年制といった明確な区切りを決めず、5～6年生から後期課程の仕組みを柔軟に取り入れていく方法もある。
- ・地域の人がふらっと学校に来て、朝の登校時間や休み時間に子どもたちと地域の方の交流が生まれる学校。地域との連携を一つの大きな柱にしたい。
- ・令和7年度の2学期を目処に小中新しい日課表での生活へ移行していきたい。

○部会で出された意見

- ・小中のグランドデザインに共通項に「個性・多様性の尊重」、「人権教育の充実」がある。川岸小学校でも、不登校傾向の子や学校に来てなかなか居場所が固定しない子もいて、その子たちが安心して学べる場は開校してからというよりも常に求められている。また、同じく「地域との連携」、「コミュニティ・スクール」の共通項はもっと活用していくべきところ。多様性のある子どもたちが安心して過ごせる居場所と地域との連携をうまく結びつきたい。
- ・地域の方と話すことがあるが、学校で今どういうコミュニティがあって、どこに地域が入り込む場所があるかわからないという話を聞く。地域の人たちがどう関わられるのか、それを提示してもらえると仲間として加わることができる。「地域の連携」の部分は何か柱となる言葉を作って、地域に向け発信するとより分かりやす

くなる。

- ・大町市の義務教育学校(美麻小中学校)の様子を聞いたことがあって、小規模特認校として、市内の心に傷を負った子たちを受け入れているとのことだった。子どもたちは伸び伸びやって、その上、学力も高かった。川岸小学校もつつじヶ丘学園があり、元気を無くしたり、色んなところで土台の部分が揺らいでしまった子どもたちがいる。今の西部中の子たちなら受け入れられるし、一緒に育っていける。つつじヶ丘学園の子で対応が難しい子もいるが、学園の先生が来て、ゆったりできる中間教室のような場所があると良い。
- ・5～6年生に教科担任制を導入することで、学力、個への対応、いろんな対応ができるというのが売り。
- ・視察した福井県の義務教育学校では、職員室の先生の席も小中ごちゃまぜで定期的に席替えを実施して、小中学校の先生が活発に意見交換できる環境づくりをしていた。小学校の先生が中学の専科の先生と話をする中で「その単元は中学でも全く同じ内容を教えているね。小学校でやっているなら、中学校はその部分のウェイトは抑えて、こっちを重点的に指導してみる」といった連携が新たに生まれた。これが義務教育学校の強みだという話だった。
- ・福井でも前期課程が後期課程と関わる行事等について、開校時から形がガチッと決まっていたわけではなく、開校後も子どもたちと先生方が意見を出し合いながら、少しずつ変えてきたとのこと。
- ・学校としてどういう授業をめざすか、どういう子どもたちの学びをめざすか、小中でしっかり共有されていないと連携は難しい。
- ・一番スムーズな移行は今の6・3年制、それから以前提案があった4-3-2年制、これは進路や高校受験などを見据えたうえで、高学年が完全に教科担任制となる。道徳や総合的な学習などを担任が行うが、国語や算数などは教科担任がやる。
- ・中学校の授業を教えた経験から、小学校の学習のどの部分が中学校のどこに繋がっているかを子どもたちに話すことができた。教師にとって良い経験になった。
- ・小中一貫校で6年生の担任をした時に、教科担任という形で算数や外国語は中学校の先生にお願いするという形はやりやすかったが、小中一貫校の場合、小学校で卒業して終わりとなるので、授業にあまり関われなかったという寂しさも残った。川岸学園は1～9年生という形で、6年生で卒業して終わりという縛りがない。子どもたちにとっては教科担任で授業をやっていくことはすごいプラス。
- ・中学の理科の免許を持っているが、自分が中学校で理科を教えるというイメージが持てなくて、中学で授業をやったことがない教師が中学の教科を教える、川岸学園が開校するので、中学校へ行って教えてくださいと言われると戸惑いも大きい。開校に向けて、教員間でも、どういう連携ができて、どういう授業をしていくか、研修が必要であり、学校と中学校で行き来してお互いに授業をやろうというのは時間がかかると思う。
- ・社会科を小学校、中学校で指導した経験があるが、社会科は小学校と中学校で重なることが多く、小学校でやって、また中学校でもおなじことやるのかということがあった。何度もやる良さもあるが、ちょっともったいないという気持ち。どんな風に1～9年までやっていくか、しっかり考えていく必要がある。

- ・小学校の立場からすると、小学校の先生は教材研究をやろうと思えば限りがなく、毎日違う授業で、1回やった教材研究が2度と使えない場合もある。中学校だと、今年やった単元が来年も使えて、1回教材研究をするとある程度応用が効く。小学校の場合、今年5年生をやって、来年また5年生を指導するということはあまりないので、深い教材研究はなかなか難しい。また、自分の専門外の教科となれば、どうしても薄くなってしまい、教科書どおりやって終わりになる。
 - ・小学校の5～6年生に教科担任制の導入というところからスタートというのが当面の間、現実的では。5年生の担任の先生が中学校3年生の入試対策を行うというのは責任が重い。
 - ・小学校の免許を持っていないが、持っていたとしても、小学校の先生をいきなり担当するというのはイメージが沸かない。
 - ・新たなことに挑戦する場になる。時間的なことや心理的に大変というところもあるかもしれないが、教師として、資質、能力の向上に寄与するタイミングと考えてほしい。
 - ・学年段階の区切りについて、川岸地区健全育成の会でご意見を伺うと前期と後期の区切りは欲しいという意見だった。卒業式のような節目が欲しいという意見。学校としても、制度上、前期課程と後期課程があり、小学校と中学校が1つになったという形で一応区切りがある。指導要録も小学校6年間分を書いて、そのあと3年間は中学校分を書いてその子の9年間で記録として残っていく。区切りというものは大切に残さなければいけない部分だが、福井の義務教育学校のグランドデザインを見ると、1～4年生が「成長する」、5～9年生が「咲き誇る」となっており、4年生と5年生の境界がぼやけた色合いで表記されている。柔軟に後期課程の仕組みを取り入れながら、9年間を通して(幼稚園も含めると15年間)子どもたちが成長していくという形だと思う。あえて、きっちり〇・〇制といったように区切らなくてもよいのではないか、そんな運用も1つではないか。
 - ・福井の義務教育学校に勤務していた先生と話す機会があった。当初、保護者の意向を踏まえ、6年生終了時に前期課程修了式を設け、それは今も存在するが現在は保護者を呼ばず、児童生徒だけで前期課程修了式を実施している。義務教育学校は9年間の学校であるから、徐々に小中の区切りの意識を無くしていき、今では前期課程修了式は学校要覧にも明記されていない。時が経ち、保護者も義務教育学校がそういう学校という考えに変わってきているということだった。
 - ・檜川小中学校の校長先生と話したときに同様のことを言っていた。最初はどうやって区切りをはっきりしようかということに力を注いだが、今はそれをどう薄くしていくか、どう9年間で違和感なくしていくかに注力しているとのこと。
 - ・4-3-2年制や4-2-3年生などのイレギュラーな形をとった場合は、外から来た子どもはどのようにつながるのか。
- ⇒便宜上、4-3-2などの区切りを設けているだけで、基本的には前期課程が小学校、終わると小学校の課程を終了となる。義務教育学校の7～9年生までの後期課程が中学校となるので、他から転入、あるいは川岸から転出の場合に何かズレが生じることはない。

ただし、学校で特徴的な学習スタイルを導入して、小学校6年生で7年生の部分を先取りして学習するみたいなことをすると、ちょっとしたズレが出てしまうが、基本的には小学校、中学校の学習指導要領に則って、学習を進めていく。

- ・日課については少し工夫すれば違和感なく進めることが出来ると思う。
- ・小学校のグランドデザインだが、こども園と中学校も意識してこんな風につながっているというのを作っている。あと2年かけてさらに良いものにしていきたい。今日の小中学校のグランドデザインの比較も参考になる。
- ・はっきりしてきたのは、いろんな子たちに対応できる、そういう学校でありたいというのが1つ、もう1つは学力の部分。一生懸命に教科や学習に打ち込んで、力が身につく魅力のある学校にしたい。それを大事にカリキュラム組んだり、施設も整備したり、人員配置もそれを目指して進めていく必要があると思います。
- ・区切りの部分は 6-3年制をメインに5年生以降は中学校ともある程度重なって、後期課程の方でも一緒に活動していくという期間になれば良い。ただし、開校スタート時に5年生からというのも難しいところがあると思うので、6年生から徐々に広げていくのが良いと思う。
- ・小学1～6年生まで続けて担任したことが2度あって、学年間の階段のような、知識レベルが4年生から5年生に上がるとき、そのステップが大きいと感じていて、日常生活を振り返ってみると、買い物や電車に乗ったりする基本的な知識、基礎的な読み書きは1～4年生までの間に集約されている。自分の子どもが中学にあがって、数学の勉強を教えたりした時に、小学校の学習が中学のこの関数に結びいたり、連立方程式を解く時に、これを小学校で学んでいないとダメなんだということがわかった。自分のやりたい仕事、専門分野に進むための基礎学力を身に付けるのが5～6年からだと納得したこともあって、教科担任制はすごくありがたい、理にかなっている。
- ・子どもたちの精神的なレベルを踏まえると、保護者が認識している6年生までと中学生の区分はそのままでもいいが、このあたりの学年から中学生と関わる機会が出てくると良い。小学校の教員も学ばないといけないし、中学校の先生も小学校でそういう学習をしているということがそれぞれの場面で活かされると思う。
- ・先生や親には話せないが、道を歩いているおばちゃんに聞かれたら話せるという子どもが結構いる。顔は見たことあるが、深く関わってない大人だから相談できる場所があると助かる子もいる。地域の人が時々ふらっときて、朝の登校時間や休み時間に子どもたちが地域の方と話す場所や時間が演出できると救われる子どもたちはいるのかと。地域との連携というところにスパイスが入ればよい。
- ・自分が小学校の担任をしている時に、単元があって、それに対して教材研究してどうやったらみんなが分かってくれるかを一生懸命やっていた。最近読んだ論文に小学校の1年生に四則演算を教えることがゆくゆくは分数の割り算ができるところに繋がる、そのための1年だと書かれていた。そういう発想で教材研究をしたことがなかったが、義務教育学校になると小学校の先生と中学の専科の先生と一緒にあって、将来この部分に繋がるための授業だよなという発想を持って、1つ1つ授業を作っていくことになる。子どもたちが学ぶ力というのは今までとは

全く違うものになると思う。川岸学園には1～9年生までいて、中学には専科の先生がいるので、そういった環境で先生方が経験できることが羨ましい。

- ・教科担任制を4年生以下もやっているところがあるので、例えば5年生以下の学年については、教科担任制ではなく、少しずつ教科担当を取り入れながら、子どもたちの様子を見て、必要な形を考えていくこともできる。
- ・西部中の正門前にある文房具屋さんがあって、1階の事務所が空きになったので、川岸学園で地域の集まり場のような形で建物を使ってくれないかという話があった。ぜひ活用していただきたいと。
- ・中学校としては、来年度から小学生が仮設校舎に移って、6年生が中学校の校舎で生活することになるので、2学期ぐらいいを目処に新しい日課表で生活したい。引っ越し後の3学期からとなると受験生である3年生にとっても負担になる。

○他部会との情報共有

【総務部会】

総務部会で校名の選定方法を考えているところ。この校名は様々な活動にも影響してくる部分で、グラウンドデザインが決まってきた、学園の大きな方針、理想などが決まってくると、総務部会でも学校名を決めていくに当たり、話題にしやすい。

【学校生活部会】

縦割り活動について、学校の区切りの方針が決まれば、例えば5～6年生からという区切りとなれば、どんな行事ができるか、5年生からが厳しいならこの部分は6年生からといった形で議論が深められる。

○次回の部会での検討事項

- ・新年度における小中グラウンドデザインのすり合わせ
- ・川岸学園で大切にしていきたい方針、方向性の検討
- ・学年区切りの検討。

○次回の日程について

- ・令和7年4月下旬頃 開催予定